

日本アンダーライティング協会 第14回年次大会開く

国際疾病分類―腫瘍学（ICD-O）テーマに講演

日本アンダーライティング協会は5月16日、東京都千代田区の九段会館デラスコンファレンス&ンケットで第14回年次大会を開催した。講習会Aで、日本生命契約査定G主任査定医長で日本保険医学会副会長の今井理氏が国際疾病分類―腫瘍学（ICD-O）をテーマに講演したほか、講習会Bでは、㈱Cyberomix（サイバーオミックス）代表取締役社長の渡辺亮氏がDNAの解析と次世代の医療をテーマに講演した。この他、インシュアテック部会・事例研究部会の発表が行われ、各社のアンダーライターらが研究成果を発表した。当日の会場には多くの人が集まり、また会場の様子はライブ配信された。



星子氏



今井氏

冒頭、同協会代表理事の星子敏郎氏があいさつし、同大会のスポンサー企業に謝辞を述べた。また大会を含めた当協会の

インシュアテック部会や事例研究部会が報告

た講習会の講師や概要などを紹介した上で、「年で支えられており、会員各社の皆さまにお礼を申



多くの関係者が集まった

し上げる。本日の大会が皆さまにとって有意義になることを心から願っている」と述べた。

講習会Aでは、今井氏が「良性？悪性？境界悪性？国際疾病分類―腫瘍学（ICD-O）を知って査定の知識を深めよう」と題し、腫瘍の発生

原因や悪性と良性の違いという基礎的な事項から境界悪性、前癌病変、上皮内がんといった用語の知識の整理を行いながら、引受査定を行う上で必要な国際疾病分類の概要を解説した。

同氏は、がんについて国民の5〜6割が一生涯

のうちに罹患（りかん）することから、医務査定上で頻繁に目にする疾患だとし、またがん検診が普及したことで、早期が

んや上皮内がん、前癌病変などで発見されるものなど、引受査定においても案件が増えていると述べた。

腫瘍は「がん」に該当するか否かを判断する分類は、「がん登録」ではICD-Oが基準となり、日本の多くの保険会社は支払判断にICD-Oの基準を用いていると述べた。

ICD-Oコードは、5桁のコードで、5桁目に

に良性・悪性の性状が記載されており、最新版のICD-Oでは、近年は数年に一度改定されて病

理組織名の分類が細くなる一方で、良性から悪性、悪性から良性に移行するものがあると指摘した。

また、ICD-Oの改訂は、引受査定にも影響を与えることから、定期的な確認と分析が必要だとし、さらに、英国では、「がん」の定義を保

険協会の独自基準で決めていると述べた。次にインシュアテック部会の第4期メンバーによる活動報告が行われ、査定領域へのAI活用について説明した。引き続き事例研究部会第5期メンバーが日常業務の中で注目した事例についてのワークショップの成果を発表した。

講演会Bでは渡辺氏が

「生命の設計図DNAを解析し、次世代の医療を創り出す」と題し講演を行い、世界で初めてヒトiPS細胞を用いた細胞移植でDNAの配列を決定する技術（ゲノム解析）を利用した「細胞治療時代の品質評価方法」やこの技術を病理検査に応用する新たな手法に加え、「10年後に社会実装される技術開発」などを紹介した。